



兎

今年は兎年。その兎の忘れられない思い出があります。ある日、主人が藪から生まれて間もない兎の子を持って帰って来ました。さあ、それからが大変！何の知識もないままに



福井町 小西晴美さん

ストローで牛乳を飲ませてみました。日を経るごとに上手に飲むよ。うになり、次第に家族と慣れ、掌から腕を伝い肩まで行ったり来たり、その様子はとても可愛いものでした。ある日、猫が開けた玄関より出て行ってしまいました。しかし、1、2日してまた戻って来たのです。あの掌に乗る程の小さな子兎のどこに記憶力があるのかと思いました。子どもが我家に来

ると必ず触ってみたいと言ったものです。

二度目に我家を出て行ったのは、しばらくしての事でした。

それからどれ程月日が経ったのか記憶が定かではありません。もう、すっかり兎の事など忘れていたある日、私が玄関へ出ると正面に兎が2本足

で立ち、こちらをじつと見ています。その距離5センチくらい、兎と私じつと見つめ合って立っていました。きっとあの時の兎に違いはないと思いました。兎が2本足で立っているのを初めて見ました。

まるで夢を見ている様な気持ちでした。やがて兎は、静かに山の方へ帰って行きました。次は、椿町の宮崎ミチヨさんをお願いします。

市民文芸

短歌

阿南市文化祭
短歌大会作品

乗客はマスクの一人始発駅

中村 淳子

九十九坂越えて船瀬の冬至風呂

奥田 久女

門松の廃れ昭和の遠くなる

石澤 三朗

アメリカの客かしまり雑煮食ぶ

瀬藤 豊子

初写真背筋伸ばせと囲まれて

神野 島女

島黒く風ぎたる浦の初日の出

池内 明美

金箔の浮かぶ盃年酒酌む

数藤 耕風

仮名文字に雪のけはひや書道展

平野 貞子

樟脳の匂う正装寒厳し

富永 恵女

川柳

阿南川柳会
高木旬笑 選

人脈もしがらみもない呑気者

林 満子

降りる駅までに化粧が出来上がる

原 公美子

欲捨てて風と歩いている八十路

野村 敏子

祝宴に呼ばれ十八番がおどり出す

湯浅 三子

街を行く車椅子にも春の風

持木 寿栄

俳句

阿南市俳句連合会選

竹治 綾子

寒林の透け一湾の二三島